

プログラム・発表概要

2026 年 10 月 31 日 (土) – 11 月 1 日 (日)

会 場：立教大学 6 号館 6205 教室



日本英学史学会本部事務局連絡先

岩手県立大学宮古短期大学部 大前 義幸 研究室内

E メール：eigakushi@gmail.com

主催

【協力学術研究団体】

日本英学史学会

Historical Society of English Studies in Japan

大会日程

10月31日(土)

時刻	内容
12:30	開場・受付開始 6号館 6205 教室前
13:00	開会の辞 司会：大前 義幸（事務局長） 赤石 恵一（会長）
13:10-14:45	総会 総会司会：保坂芳男（副会長） 1. 学会活動報告：赤石 恵一（会長） 2. 支部活動報告：各支部長 3. 学会賞発表：増井 由紀美（学会賞選考委員長） 4. 事務局報告：大前義幸(事務局長) 【議事】 1. 2025 年度会計報告：矢ヶ崎 邦彦（会計委員） 2. 会則・学会賞規定 《その他》 次年度大会報告：赤石 恵一（会長）
15:00-16:30	記念講演 豊田 雅幸先生（立教学院展示館学術コーディネーター） 題目「英学と立教学院 150 年」
16:30	事務連絡 大前 義幸（事務局長）
16:45	立教学院展示館見学
18:30	懇親会（炉端とおでん 呼炉風来 池袋店）会費 4,400 円

記念講演 概要

立教の源流は、1874 年にアメリカ聖公会の宣教師のチャニング・ムーア・ウィリアムズ主教が、東京・築地に作った男子の学校（ボーイズ・スクール）に求めることができます。築地の学校はわずか 8 名（5 名という記録もあります）の少人数でスタートしました。そして、この塾は 150 年という長い時を経て、現在、立教大学、立教新座中学校・高等学校、立教池袋中学校・高等学校、立教小学校という 4 つの学校へと形を変え、23,000 名を超える児童・生徒・学生が集う立教学院へと発展しました。本講演では、こうした立教学院 150 年の歩みを、「英学」という観点を踏まえてご紹介したいと思います。

豊田 雅幸先生のご経歴

立教学院展示館学術コーディネーター/学芸員。専門は日本近現代史、大学史。立教学院百二十五年史編纂委員、立教学院史資料センター学術調査員、立教大学文学部史学科助教などを経て現職。その間、立教学院の歴史に関する教育・研究に従事。2013 年 4 月から、立教学院展示館設置準備室で開館準備にあたり、2014 年 5 月 9 日に立教学院展示館を開館。

大会日程

11月1日(日) 《6205 教室》

10:00-11:55 研究発表【午前の部】 司会：大前 義幸

時 刻	内 容
10:00-10:30	文典翻訳事始め――馬場佐十郎『西文規範』の原典 Palm の文法書について 岡田 和子（筑波大学・非常勤） プレゼン 20 分・質疑 10 分
10:35-11:05	旧制第一高等中学校入試英文和訳問題にみる英語教養の一端 升井 裕子（立教大学外国語教育研究センター） プレゼン 20 分・質疑 10 分
11:10-11:40	岡山中学の外国人講師に関する研究 保坂 芳男（兵庫大学） プレゼン 20 分・質疑 10 分
11:45-12:15	1892 年文部省外国留学生規程の成立と動向 平田 諭治（筑波大学） プレゼン 20 分・質疑 10 分
12:10-13:15	写真撮影・昼食

13:15-15:40 研究発表【午後の部】 司会：赤石 恵一

時 刻	内 容
13:15-13:45	朝河貫一の日記から甦る近代化を拓いた人たち：幼児教育よりベラ・アルウィン 増井 由紀美（敬愛大学） プレゼン 20 分・質疑 10 分
13:50-14:20	西洋人が魅了された保津川下り：通訳ガイドが押さえておくべき歴史と文化 千代間 泉（同志社女子大学嘱託講師） プレゼン 20 分・質疑 10 分
14:25-14:55	J. リギンズ (John Liggins) の功績を調べる 西口 忠（桃山学院史料室 特別研究員） プレゼン 20 分・質疑 10 分
15:00-15:30	閉会の辞 増井 由紀美（大会会長）

参加案内・会場情報

参加費

無料（会員外も参加費無料）

諸注意

- 大会出席の折には、各自、本プログラムを印刷のうえご用意ください。
- 会場内は禁煙です。所定の場所以外での喫煙はご遠慮ください。
- 会場における録音・録画はお断わりしています。ご了承ください。
- 発表時にハンドアウトを用意される方は、20 部程度印刷のうえご用意ください。
- 会期中、大学構内の食堂および売店は閉まっています。昼食はあらかじめご用意ください。

交通

JR 池袋駅から会場までのアクセス

JR 各線・東武東上線・西武池袋線・東京メトロ各線「池袋駅」下車。池袋駅西口より立教大学池袋キャンパス正門まで徒歩約 7 分です。地下道をご利用の場合は、**C3 出口**から地上に出て右方向へお進みください。

立教大学 池袋キャンパス 6 号館 6205 教室

〈池袋キャンパス案内図〉

https://rguide.rikkyo.ac.jp/2026/files/common/ikebukuro_annaizu.pdf

※ 正門からは入構せず、正門向かいの建物「セントポールプラザ」（1 階：ローソン）横の門からご入構ください。

※ セントポールプラザ横の門が閉まっている場合は、そのまま直進し、ふくろうの像が設置されている角を右折してください。左手に 6 号館前の門がありますので、そちらからご入構ください。

大会役員

全国大会会長	増井由紀美
大会実行委員長	升井裕子
大会実行委員	赤石恵一、西口忠、保坂芳男、矢ヶ崎邦彦、千代間泉、大前義幸

発表概要

発表者・題目

岡田 和子

文典翻訳事始め——馬場佐十郎『西文規範』の原典 **Palm** の文法書について

升井 裕子

旧制第一高等中学校入試英文和訳問題にみる英語教養の一端

保坂 芳男

岡山中学の外国人講師に関する研究

平田 諭治

1892 年文部省外国留学生規程の成立と動向

発表概要

発表者・題目（続き）

増井 由紀美

朝河貫一の記事から甦る近代化を拓いた人々：幼児教育よりベラ・アルウィン

千代間 泉

「保津川下り」の歴史と E. M. Satow の関わり—筏から川船、そして観光川下り船へ—

西口 忠

J. リギンズ (John Liggins) の功績を調べる

日本英学史学会 第 63 回全国大会

2026 年 10 月 31 日 (土) ～11 月 1 日 (日)

翻訳文典事始め

——文法書翻訳は馬場佐十郎から始まった——

岡田和子（筑波大学非常勤講師）

幕末の安政期から明治期にかけて、蘭英獨仏語の直譯文典が数多く出版されたが、その嚆矢は、オランダ通詞・馬場佐十郎の『西文規範』、又の名『和蘭文学問答』である。岐阜県の江馬家にその写本が存在し、その凡例（文化 8/1811）に、原本は K. van den Palm の *nederdeutsche spraekkunst voor de jeugt*. 1774. とある。この度、これと同一と思われるものを入手できたので、馬場の譯文との比較を試みた。

Palm のこの原本は、薄い分冊 4 冊を合本したもので、2 冊ずつ出版年が違い、第 1 冊が文字と綴り方で 1774、第 2 冊が品詞論で 1776、第 3 冊が文論で 1776、第 4 冊が音節と単語で 1774 年の出版、馬場が扱ったのは第 1～2 冊である。

これらは、問答形式を用いて子供にオランダ語の基礎を教えるもので、綴りは古い時代のものである。が、江馬家の写本は 1804 年以降の新しい綴りで書かれており、この点は原本と大きく異なっている。しかし、原本のオランダ語を読み、それを馬場の譯文と照合したところ、馬場の翻訳は非常に正確であることが判った。初級の教科書ではあるが、その蘭文は、一文中に従属接続詞、関係代名詞、分詞構文が重層的に用いられ、接続法 1 式もしばしば見られる。これを読みこなす馬場の翻訳力は、蘭人と直接交渉する長崎という土地の賜物であろう。

馬場は、『西文規範』の序文で、一部を抜譯し、品詞論は全訳したと述べている。今回の考察は、次の 3 点である。

1. 原書のオランダ語のレベル
2. 馬場が抜譯した部分の特定、及びその内容と訳し方
3. 動詞の活用表に突然現れて何の説明もない《終説法》Eindigende wys という用語の持つ問題

この第 3 の問題点のせいで、日本の蘭語学とは直接的に関係のないオランダ本国の言語事情に踏み込まざるを得なくなったが、馬場の翻譯を通じて、日本には残っていない原本が確実に長崎にもたらされていたことが確認された。長崎で中野柳圃に師事した馬場は、江戸幕府の御家人となって蕃書和解御用を務めるかたわら、塾を開いて江戸の和蘭語学習を指導したが、そのためのテキストとして Palm を翻訳したのではないか、と思われる。

本発表は、1886（明治 19）年から 1893（明治 26）年までの第一高等学校入試英文和訳問題 71 題を対象に、出題英文の典拠・媒体・原典からの変容を検討するものである。各問題の出典を調査し、元となった文献や作品を特定した。原典やリーダー、文法書、引用集などとの対応を確認するとともに、入試文に残された内容・価値概念を分析した。

分析の結果、出題内容は文学・道徳に限定されず、歴史・伝記、自然・実用、日常的内容などにも広がっていた。また、確認できた典拠には、文学作品だけでなく、道徳教材、リーダー、文法・作文教材、引用集、少年向け読物などが含まれる。さらに、Cowdery や Goldsmith 等の原典と入試文の比較事例からは、文脈の削除、語句の置換、照応関係の補修などが確認され、原典の思想や価値内容がそのまま入試文に保持されない場合もみられた。

第一高等学校の英文和訳問題を、多様な英語文献や教材から素材を選び出し、編集・再構成された「独自の文章」として位置づけ、そこに明治期の「英語教養」の一端を見いだしたい。

岡山中学の外国人英語講師に関する研究—Frank Muller に焦点を当てて—

保坂芳男(兵庫大学)

発表者は 2025 年 12 月中国四国支部例会で、「明治期の岡山中学の英語教育に関する研究—日本人・外国人英語教師に焦点を当てて—」という題の発表を行った。その発表では、明治期の岡山中学の英語教育に関して、入試問題、日本人英語教師、外国人英語教員に焦点を当てて述べた。

岡山中学が、少なくとも西日本を代表する進学校として発展していった過程で、当時の校長による英語教育の重視、優秀な日本人英語教師の採用、外国人英語講師の積極的な登用があったと考えられる。

この発表では外国人英語講師に関して十分に論じることができなかった。発表者の調査では戦前の岡山中学には以下9人の外国人英語講師が勤務していた。

名前	勤務時期
J. A. レイールツ(レノールか?)	明治 20 年～明治 21 年
J. J. ボックス	明治 21 年～明治 24 年
A. A. Davis	明治 24 年～明治 27 年(明治 26 年1月か?)
Frank Muller	明治 26 年 2 月～明治 27 年 3 月
H. S. ニューヘン	明治 27 年～明治 29 年
C. E. Stevens	明治 27 年～明治 29 年
E. Gauntlett	明治 33 年～明治 36 年
R. J. Inglott	明治 38 年～大正 2 年
G. ブース	大正 11 年～大正 13 年

その後の研究で岡山中学に勤務した外国人英語教師の実態が徐々に明らかになった。今回の大会では、特に Frank Muller に焦点を当て、岡山中学のみならず日本の多くの学校(和歌山中学、海軍兵学校、青山学院、学習院、外国語学校、神戸高商)に勤務した彼の経歴と、英語教育への貢献について考察する。その詳細は学会発表で報告する。

本発表は、1892（明治 25）年 11 月に勅令をもって公布され、近代日本における留学制度史の里程標となった、文部省外国留学生規程の成立と動向を明らかにし、その歴史的位相を検討・考察することを目的とする。文部省から選抜・派遣された数々の留学生とその活動・動向を拵づけた、制度・政策史的状况について探究・解明しようとする研究の一部である。

この文部省外国留学生規程（規程と略）は、留学制度の変遷のうえで期を画する法令でありながら、従来の留学史研究のとらえ方は不正確で誤りが多い。渡辺實『近代日本海外留学生史』（下、講談社、1978 年、624 頁）は、「文部省の海外留学生の規則は、明治十五年二月と十八年十二月とに改正されてきた。ところが本年〔明治二十五年〕になってその十一月に勅令をもって「文部省外国留学生規程」を改正した。その主旨は旧制と大差がないとはいへ〔中略〕定員を二十八名としたことは注目すべきことである」と述べている。明らかなように、規程は 1892 年に「改正」されたのではなく、「旧制」との連続性を有しつつも、はじめて制定されたものであり、このときの「定員」は「二十八名」ではなく、本論でみるように「二十二人」である。

石附実『近代日本の海外留学史』（中央公論社、1992 年（原著 1972 年）、305 頁）は、つぎのように述べている。すなわち、「「貸費留学生規則」以後、文部省は、一五年二月に「官費海外留学生規則」を制定し、のち、三六年に「文部省外国留学生規程」を公布するなど、一連の法規改訂を進め、留学制度の体系化を図ったが、それらの諸規定に貫かれている文部省の政策上の重点は、官費留学の国家的拵づけの強化であり、他面それは官費留学を官立の高等教育諸機関だけに限定しようとするににあった」という。ここでは明治「三六」年としているが、公布年がたんに間違っているというだけでなく、この時期に「一連の法規改訂を進め、留学制度の体系化を図った」とする、事実関係と歴史認識をめぐる過誤を犯している。「官費留学の国家的拵づけの強化」というのは重要な指摘であるが、その後の記述を含めて誤謬と混乱が少なくないといわざるをえない。

天野郁夫『教育と近代化——日本の経験』（玉川大学出版部、1997 年、第 3 部（原著 1977 年）、270～271 頁）や、辻直人『近代日本海外留学の目的変容——文部省留学生の派遣実態について』（東信堂、2010 年、62～63 頁）は、およそ正確に紹介・言及しているが、その成立と動向を掘り起こしているわけではない。平田諭治「近代日本の文部省留学生・再考——留学生の義務規定とかれらの日記に着目して」（日本教育学会編『教育学研究』第 89 巻第 2 号、2022 年）は、1882（明治 15）年に制定された「官費海外留学生規則」（規則と略）以降の法制度的な展開と、文部省が課したさまざまな義務事項について明らかにしたが、規程に焦点づければ検討・考察の余地は小さくない。そこで本発表では、規程制定にかかる公文記録などを探りながら、その性格・意味と問題構成にまで迫っていきたい。

〔付記〕本研究は JSPS 科研費（課題番号：24K05651）の助成を受けたものである。

増井由紀美研究報告について

『朝河ペイパーズ』から甦る近代化を拓いた人たち：

幼児教育よりベラ・アルウィン

日本英学史学会編『英語事始』(ブリタニカ社, 1976)が出版されて 50 年が経つ。西洋の文明を日本がどのように受容してきたかを紹介だけでなく、さらに研究が深化されることになる分野が 6 章を設けてわかりやすく整理され提示されている。(1 章「英学との出会い」2 章「蘭学より英学へ」3 章「遠来の異人たち」4 章「文明開化の時代」5 章「ひらかれた教育」6 章「英語と日本語」。)全編を通し、近代化を拓いた人たちの働きが、絵図と共に示されていて、多くが小説、舞台、映画、テレビ番組のモデルにもなっているせいか興味深い。

因みに、来年の大河ドラマ『ジョン万』の主人公中浜万次郎は、第 1 章で紹介されている。50 年を経て、万次郎がどのような角度から描かれていくのか楽しみであるが、今年の朝ドラ『風、薫る』では、最初の 5 名の官費女子留学生山川(大山)捨松の新しい側面(アメリカより看護学を持ち帰る)が描き出されていた。(本書においては、第 4 及び 5 章に捨松の名前は登場するが、大山巖夫人・社交界の華としての記述に留まっていたに過ぎない。)

さて、私が研究してきた朝河貫一であるが、本書にその名前は登場しない。朝河の日記や往復書簡、ノート類が *Asakawa Papers* (朝河文書) としてイェール大学図書館に所蔵されていることは、一部研究者には知られていたが、本格的な調査研究が始まったのは 1980 年代半ばからであり、朝河の名前もその功績も今日ほどは知られていなかった。私は、これら資料を中心に、日米で関わってきた人物との交流から見えてくる時代を読み解き、本学会において報告の機会をいただいていたが、今回研究対象とするのは、幼児教育の先駆者になったベラ・アルウィン(Sophia Arabella Irwin, 1882-1957)である。

朝河とベラとの関係については、朝河貫一研究会の会員であった故石川衛三氏が第一人者であり、1990 年代、2 人の往復書簡を主な資料として朝河貫一研究会編の出版物、及び研究会で報告されていた。方や比較法制史家として、方や幼児教育者として夫々の人生を全うした 2 人であるが、ベラ・アルウィン側の資料を重ねて読むと、共通の人間関係(各方面の有識者)が度々現れるところに、2 人共が、変化する時代の中で先駆者として生きた証であるとの印象を受ける。

冒頭に述べた『英語事始』であるが、50 年前に今日の研究があったならば、2 人とも本書に掲載されていたと思う。

発表者はこの度、*Hozu Rapids: From Timber Rafts to River Boats to a World-Famous Attraction*（2026 年 8 月 17 日）を刊行した。本書は、拙著『黎明期の京都国際観光』（2025）で論じた京都府亀岡市の「保津川下り」（以下川下り）の初期国際観光史のエッセンスに加え、観光川下り以前の保津川の舟運の歴史を新たにまとめたものである。本発表では、その内容の一部を紹介する。

第 1 に、新たにまとめた部分は、川下り以前の保津川の舟運についてである。先行研究をもとに整理すると、5 世紀（推定）に秦氏が現在の渡月橋付近に葛野大堰という堰を作り、8 世紀には平安京造営のため丹波地方の木材が筏として流された。17 世紀初めには豪商・角倉了以が保津峡の拡幅工事を行い、和船による物資輸送が可能となった。角倉了以の保津川舟運への貢献は、和船・船頭の技術を取り入れたことを含め、重要である。この伝統ある舟運は人の輸送にも用いられたが、近代に入り西洋人の知るところとなり、急速に観光の注目を集めた。物資輸送のための船は、観光川下り船へと転用が可能であった。

第 2 に、西洋人の川下りの発展の背景には、次々と情報が更新された英文ガイドブックの貢献があったことを既存研究より振り返る。日本初の英文京都観光案内書である *Stray Notes on Kioto and Its Environs*（1878）は、京都市内から乗船場までの行き方、費用、注意点などを含めて川下りを紹介し、その後、E. M. Satow と A. G. S. Hawes 編著の *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*（1881）（以下ハンドブック）を初版とするハンドブックシリーズが情報を更新し続けた。初版出版の同年 11 月には、ヴィクトリア女王の孫である王子 2 名が、英国領事館員として指名され随行した Satow とともに川を下った。この出来事はヨーロッパ諸国の王族による日本旅行、また一般の西洋人にも影響を与えたと考える。

調査にご協力いただいた保津川遊船企業組合のご関係者に感謝申し上げます。

J. リギンズ(John Liggins)の功績を調べる

桃山学院史料室 特別研究員
西口 忠

J. リギンズは日本の英学史において、またキリスト教の日本伝道において、その他において大いなる貢献をした。その功績を3点に絞って以下に記す。

(1) 日本本土に最初に上陸したプロテスタント宣教師

J. リギンズ(1829-1912)はアメリカ聖公会の長老で、中国伝道のため1856年に上海に到着。しかし、翌年にマラリアに冒され、また暴漢に襲われるなどしたため、療養のため1859年5月2日に長崎へ。同僚 C.M. ウィリアムズ(Channing M. Williams)は翌月、長崎に着く。この間、5月26日付けでアメリカ聖公会外国伝道委員は両長老を日本伝道の宣教師として任命。しかし、リギンズは病気再発のため、1860年2月に英国を経由して米国に帰ることになった。1861年4月、英国から国禁であるキリスト教の日本伝道方策を手紙で発信、The Spirit of Missions の1861年5月号に掲載され、さらに他誌に転載される。この内容については1883年、大阪で開催された日本プロテスタント宣教師会議でフルベッキが報告した。

(2) 英和対訳会話書を始めて刊行した

リギンズが長崎に到着した時は、まだ開港の前であった。米国領事の斡旋、中国在留宣教師 F.W. サイルと長崎奉行の約定(病氣静養と英語教授)により、崇福寺内に居住の確保と8名のオランダ通詞に英語を教授することになった。通詞たちは週3日、崇福寺の広徳院に通った。そしてリギンズは通詞たちから日本語を学んだ。

リギンズは帰国途中の1860年、英和対訳会話書 (*Familia Phrases in English and Romanized Japanese*) を上海で刊行。さらにウィリアムズ、フルベッキ、ヘボンらの勧めもあって、再版(1867、ニューヨーク)、三版(1873、大阪)を刊行。The Spirit of Missions (1912.2月号)は which was a great help to missionaries and others in making their first acquaintance with the language と記載する。

(3) ヘボン式ローマ字綴法は「リギンズ式ローマ字綴法」か？

昨年12月22日にローマ字表記を「ヘボン式」とする内閣公示があった。リギンズは英和対訳会話書の作成にあたって、漢和対訳口語句集の漢文を英訳、日本語のローマ字表記は中国在留宣教師 S.W. ウィリアムズ(Samuel Wells Williams)の推薦した方式によった。7年後に出版されたヘボンの『和英語林集成』第1版のローマ字綴りはリギンズの著書の綴りと同じだという(前島潔「ヘボン式羅馬字の始—リギンズ長老の業績—」、1935.1.11)。